不幸のせいで幻想郷へ

スピノ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界一不幸な少年――――内村　和人(うちむら　かずと)は、ある日突然幻想入りした。

大した力も強すぎる能力もなければ天性の才能もない、そんな彼は幻想郷で経験と小手先の技を頼りに必死こいて生活をしていく。

これは美しくも残酷な幻想郷をハイテンションで駆けまわる、とある青年を描いた幻想入り小説。

目　次

プロローグ ―――――――――――――― 1
第一話 『ジャイアニズム～具象化しりとりしたかった～』 ―― 7

プロローグ

『バナナの皮で滑ってこける』、『親が離婚する』、『かっ飛ばしたボールで窓が割れる』、『冤罪を駆けられる』、『一日でタンスの角に小指を三十回ぶつける』、『イラついてボールを蹴り飛ばしたら校長先生の顔面にジャストミートする』……。

この世には今上げたような不幸の他にも数多の不幸が存在し、人々を苦しめている。不幸は人々に平等に襲いかかり、これから起こる幸福を引き立たせているのだろう。

つまりは、不幸さんは言うほど悪い奴じゃないのだ。

だが、俺は言いたい。

なんで僕に襲いかかる不幸だけ全力で僕を殺しに来ているんですか、と。

冒頭に挙げた例など言うまでも無く、俺はこの世に存在する全ての不幸をこの身に受けた自信がある。

買った高級品は全て故障していて返品不可。麻薬取引に巻き込まれギャングに追われ、生コンクリートごと海に沈められたこともある。

こんなにも酷い目にあってよく生きているな、と自分の体を褒めてやりたい。

しかし、俺は今までの人生の中で学んだのだ。不幸ははらうことが出来る、と。

『厄払い』、というものをご存じだろうか。簡単に言えば、『あなたにつく悪いことやものを追い払ってあげますよー』という儀式のようなものだ。

正直胡散臭いものだが、驚いたことに効果が表れた。

一時的に。

厄払いをして不幸が実際に亡くなった時、俺は調子に乗って商店街の真ん中で踊りまくったものだ。何時間踊り続けても怪しいおじさんが路地裏から出てこないのも、俺のテンションをさらに上昇させた。

が、そんな幸せは長く続かない。
厄払いをして一週間後。今まで溜めに溜めた一週間分の不幸が一気に襲いかかってきたのだ。マジなんなんですかこの世界。
ちなみにその時の不幸はバスジャックと銀行強盗と交通事故でした。俺よく生きてたな、としみじみ思う。
まあ、そんなことを繰り返して早１５年。今年は受験を控えているが絶対に落ちるだろう。何故なら、俺の後ろには常に不幸さんがスタンバっておられるのだから。
そして、その不幸さんは今日、必ず俺を殺しに来る。
なぜならば、今日は厄払いをしてから丁度一週間の日なのだ。
さあ、溜めに溜めた我が不幸。俺の生命力を下して見せよ。
「って言っても、襲いかかる不幸は予測済みなんですけどねー」
俺は現在バスに乗っている。この場合、身に起こりそうな不幸は大体予想できるのだ。
まず比較的よく起きるのがバスジャック。北海道まで連れて行かれるのが典型的なパターンだな。
次に交通事故。この場合、大体バスが宙を舞う。
これらの不幸にはもう慣れたもので、比較的対処がしやすい。ということで、俺はバスに乗って不幸を迎え撃たんとしているわけだが……。
「え、時間止まっちゃったよ」
いつもの日常の風景が、突如として灰色かがった空間に塗り替えられてしまった。これはバスジャック犯の仕業でも新手の交通事故でもない。
まさかの宇宙人登場だろうか。冗談よしてくれマジで。
「まあ、ここで俺は取り乱したりしないんだけどね。時が止まるとかはまだ大丈夫。不幸のエキスパートたる俺なら、こんな状況パターン別にして予知できちゃうから」
そうやって余裕をぶっこいていると、俺の前の空間が突然開き、無数の目に見詰められる。これが尊敬の眼差しや美少女の上目使いなら大喜びだが、残念ながらこの目は俺をそんな目で見ていないらし

い。
　不気味なまでに感情の読み取れない視線の数々。俺は久しぶりに、目の前の不幸に対して畏怖した。
「御機嫌よう。これから貴方を、忘却者の楽園に招待しますわ」
　耳元で艶のある声が響き、俺は咄嗟に振り返る。が、振り返ったと同時に胸の真ん中を押され、俺は成すすべなく開いた空間に吸い込まれた。
　視界が一瞬にして闇に包まれ、無数の視線に体を射られる。
「あ、はいはいはい。これはあれだね、エターナルフォースブリザードパターンだね。俺は死ぬ」
　ここまで来ればもう笑うしかない。これは不幸というより祟りではないか。なんて理不尽な呪いなんだろう。
「あなたがこれから招待される場所は幻想郷。ここで、あなたにはやってもらいたいことが――――――あるかもしれませんわ」
「これは拉致って言うんですよお嬢さん」
「あらやだお嬢さんだなんて。ゆかりん嬉し泣き」
「泣きたいのはこっちだあああああああ!!」
　急速に落下する俺の横に現れた女は、マイペースすぎる口調と行動で俺を困惑させていく。コヤツ、なかなかできる。
「そんなに悲しまなくてもいいんじゃなくて？　もしかしたら感動のラストが貴方を待っているかもしれないわよ？　君の心臓を食べたい！」
「それただの殺人！　ヤンデレ通り越して少年バラバラ殺人犯になっちゃうから！」
　俺の必死の訴えも虚しく、目の前の女性は小さく笑うと俺に手を振った。
　……おいおい何する気だ。
「――――――ようこそ、幻想郷へ」
　瞬間、その楽園は俺の前に展開された。

◆◆◆

涼しげな風が頬を撫で、俺は意識を覚醒させた。目の前にあるのは木々の葉で覆われた空。どうやら森の中らしい。
「ちくしょう……今世紀最大の不幸がとうとう俺の前に姿を現しやがった。これはさすがに予想できないよなぁ……」
大きく伸びをして、俺は耳を澄ました。自分が知らないところに強制的に送還された場合、まずその土地の情報を得ることが生死を分けることは経験済みだ。
聞こえてくるのは木々が揺れる音に鳥のさえずり。そして……おそらくにぎやかな市場かなんかの物音だ。
とりあえず、その市場に行ってここがどこだか人に尋ねてみるのがいいだろう。
ここが種子島や白神山地くらいなら徒歩で帰れるはずだ。
まあ、そんな簡単に解決しそうもないが。
しかし、くよくよしていても始まらない。勇敢で不幸な強い僕は、こんな時でもまっすぐ前を向けるのだ。
ということで、歩き続けて15分ほど。市場の音が近くなってきたところで、さらなる不幸が俺に牙をむいた。
「キィィィィィィィィッ!!」
「日本語喋ってくださ――――――おわっ!?」
俺は現在、よくわからない生命体に追いかけれている。別に自分から攻撃を仕掛けてわけじゃない。上空を飛行していた奇妙な動物が俺を見るなり襲いかかってきたのだ。
この無礼な生命体に十の盟約を教えてやりたい。
「みんな仲良くプレイしましょ――――――ッう!!」
勢いよく降下し、俺に向かって爪を突きだしたコウモリ型生物に渾身の後ろ回し蹴りをお見舞いする。蹴りは顔面にクリーンヒットし、コウモリ君は金切り声をあげて吹っ飛んだ。
十の盟約？　そんなのは知らん。俺が従うのはマイルール。心の友はジャイアンだけである。
「ざまあみやが――――――」
吹っ飛ばしたコウモリ君に嫌味の一つでも言ってやろうと振り

返った瞬間、コウモリ君の体が二回りも大きくなり、巨大なカマキリに変貌を遂げた。
　これはさすがに逃げる気が失せる。おそらくだが、でかい図体のわりに素早いはずだ。
「これがホントのファイナルファンタジーってか……俺の命までファイナルすんのは勘弁なんだけどなぁ……」
　大きく息を吐き、俺は苦笑した。背中は冷や汗で濡れ、目の前には不幸がもたらした絶望が俺を睨めつけている。
　相手が人間ならまだしも、こんな生命体がでてきたらさすがにお手上げだ。
　勝率は極めて低い。いや、もはや皆無である。
「だけど……」
　亡き母の教えに、こんなものがある。
『強く生きなさい……生を諦めることは許さない。本当にどうにもならない時は、運命が嫌でも殺してくれるわ』
　どこまでもお節介で迷惑な母親だ。でも、感謝している。
「生きてやるよちくしょう……！」
　拳を強く握り、前を見る。
　俺は運命に抗う覚悟を決め、全力で拳を敵に突きだした。　が、その拳は届くことはなかった。
　拳が敵の届く直前。
　視界が、世界が、一瞬にして闇に塗り替えられる。
　困惑が心を埋め尽くす中、感覚すらも消え失せそうなその空間の中でその声は響いた。

「――――――あなたは食べてもいい人類？」

第一話　『ジャイアニズム～具象化しりとりしたかった～』

「あなたは食べてもいい人類？」
背後から聞こえるその声は、少女が発したかのように透き通っていた。
しかし、発せられた言葉が言葉だから声の主は俺に友好的な奴ではないことがわかる。
俺の不幸様も本気を出してきたか。
「目の前にいたカマキリなら食べてもいいぞ！」
早口で言い終えて、全力で地面を蹴る。ここに居ては間違いなく死ぬ。こうなれば逃げるが勝ちだ。
プライドなんて命に代わるものじゃない。
俺が駆けだしたと同時、肉がつぶれたかのような生々しい音が響いた。暗闇で何も見えないが、おそらくあのカマキリがやられたのだろう。
一撃でやつを仕留めるとか北斗神拳でも習ってるのか。
「待ってよ。私お腹空いてるんだけど」
突如として視界を覆っていた闇が一点に集中し、俺の目の前で一本の鋭い槍を形成する。俺は慌てて急ブレーキをかけ、砂ぼこりを立てて静止した。
闇属性とか完全にラスボスの特権である。俺には不幸しかないっていうのに。世の中理不尽だ。
「で、あなたは食べてもいい人類？」
振り返ると、頭にリボンを付けた金髪の少女が立っていた。深淵のようなワンピースは闇の尾を引いており、この子がただの人間でないことを暗示している。
コイツはヤバそうですな。
「性的ならウェルカムだけど、物理的は嫌です。てか食べちゃダメです」

「博麗の巫女って知ってる？」
　一瞬考え込む動作をした後、少女は小首を傾げた。俺はその少女の問いに問いで返答する。が、それが大きな間違いだった。
「なにそれ？」
「食べてもいいんだ！」
　瞬間、少女が笑うと同時に槍が放たれる。槍は深淵を引きながら目まぐるしいスピードで俺の前に迫り、肩を掠めて背後の木に激突した。背後では鈍い音が響き、木が何本も倒される。
　何だろう、このドラゴンボールなみの演出は。こんな光景を見ても全然『オラ、わぁくわくすっぞ！』って思わない。てか思えない。
　カカロットは偉大である。
「こ、ここは話し合いでなんとかしよう！　ね？」
「あなたはご飯に『いただきます』以外の言葉をかけたことがある？」
　お嬢さん、この場合『いただきます』じゃなくて『体バラすぞ☆』と言っているようなもんですよ。ジャイアンでもこんなことはしませんよ。
「じゃ、じゃあここは具象化しりとりで――――――――――」
「いただきます」
　少女が両手を広げ、十字架のようなポーズをとる。すると虚空に闇がいくつも現れ、ガトリングガンのように放たれた。
　俺は真横に転がることでこの攻撃を回避。地面が盛大に抉り取られる音にびびりながら、全力で駆けだした。
　ここで戦うなんて自殺行為は俺には出来ない。命は大事なのだ。
「いッだァ!?」
　右足に鋭い痛みが走り、俺は体制を崩して地面を転がる。そして目の前にあった木に正面から衝突した。口の中で土と血の味が交じり合う。気分は最悪だ。
「……俺はてっきり、美少女とはもっと平和な勝負が出来ると思ってたよ。ディスボードはどこだっての……」
「珍しいね。私を見て取り乱さない人はいないのに」
「そりゃそんなダイナミックな『こんにちは』したら取り乱すだろう

よ。あいさつ代わりにガトリングガンとか、面接官が聞いたら引きこもるぞ」
ニヤリと笑い、足に力を込める。血が滲んで残念な見た目となっているが、別に美脚を目指しているわけでもないので気にしない。
何度も言うが、戦ってしまったら終わりだ。相手は人間じゃないものと思った方がいい。
目指すは森の奥深く。できるだけ人の気配があるところからは離れねばなるまい。
こんな物騒な女の子を一般人の前にだしたら大変な騒ぎだ。もうでちゃってるけどね、俺の前に。
「逃げようとしてるでしょ？　残念」
「――――――ッ!?」
俺の背後にある木から、気がつけば闇で形成された棘が生えていた。それは俺の腕を貫通し、杭の役割を果たす。
まずい。このままじゃ逃げれら――――――
「さようなら」
空気が弾かれたような音が響き、少女の手から黒い球体が射出される。それは俺の首元に一瞬で到達し、俺の脳内に『死』の文字を深々と刻み込んだ。
今までの不幸で数々の死の予感を感じてきた俺だが、ここまで無慈悲で、理不尽で、具体的な死を感じたことはない。走馬灯なんか流れない。あるのはただ、実感だけだ。
抵抗する力も、沸いてこない。
あるのはただ、絶望のみである。
『強く生きなさい……生を諦めることは許さない。本当にどうにもならない時は、運命が嫌でも殺してくれるわ』
……なんでこんな時に限って、この言葉がでてくるのだろう。
こんな無茶なことを言う母親も、いつまで経ってもこの言葉を忘れない俺どうかしている。
「――――やっぱ死にたくなかったあああああああああああ!!」
弱者は弱者なりに潔く。全力で心の内を叫ぶ。

駄々でもハッタリでもなんでもいい。とにかく生き抜いて見せる。
どんな理不尽も、全てを壁にしてぶっ壊してやる。
「――――ッ!?」
突然、ギイン！と何かが弾かれたような音が響き、黒い球体の軌道が首へ直撃コースから紙一重で外れた。
球体は背後の木々を抉りとり、森の中へ消えていく。
元気玉かよ。
「結界？　ああ、能力が発現したんだ」
「妙に中二くさいこと言いやがって！」
鋭い痛みに耐えながら、血濡れの棘から腕を強引に引き抜く。鮮血が地に落ちるが、そんなことは気にしていられない。もうそろそろ意識も限界だ。
一刻も早く逃げなければ。
「逃がさな――――――」
ぶれる視界の中、体の奥底で何かが動くのを感じた。それはあまりに荒々しく、吐き気を催すほどの衝撃。
俺はそれを反射的に片腕に集め、願った。
もはやこの行動に理屈や思考はない。本能が言っている。
『――――夢想しろ』
「水だ。あの闇っ子を足止めできるだけの大量の水がほしい」
瞬間、ここら一体に大量の水が具現化する。少女は目を見開いて濁流に呑まれ、周りの木々は鈍い音を響かせて流された。
プールをそのままひっくり返したかのような衝撃と濁流に、俺だけが呑まれないなんて都合のいい話があるわけもなく。
俺はなすすべなく自らが生み出した水に飲まれて意識を失った。

◆◆◆

昼下がりの博麗神社にて、一人の巫女が茶を啜っていた。
彼女の名は博麗霊夢。幻想郷の結界を維持する役割を担う巫女である。

「れーいむー！」
「騒がしいのが来たわね……」
　霊夢は親友の声を聞き、大きくため息を吐く。異変を余計にややこしくする天才・トラブルメーカーの霧雨魔理沙の登場である。
「人を見るなりため息とはなんだ。さすがに扱いが雑なんじゃないか？」
「だって、魔理沙はいつも面倒事を持ち込むじゃない。ほら……今日も」
　霊夢の視線の先には、全身がびしょ濡れの青年が箒にぶら下がっていた。大方、魔理沙が拾ってきた外来人だろう。
　その証拠に妖力で付けられたと思わしき傷が腕と脚、そして肩に見られる。
　妖怪にでも襲われたのか。
「拾いものだぜ？　多分外来人だ。辺り一面酷い有様だった。洪水でも起きたみたいにな」
「はあ……異変じゃないでしょうねぇ」
「それはコイツに聞けばいいさ」
　魔理沙は青年を担ぎ、縁側から母屋に入っていく。青年を寝かせておく気だろうか。
「しばらく縁側で寝かせておきなさいよ。服が濡れたままだと床が濡れちゃうでしょ」
　幸い今は夏だ。この灼熱の地獄なら、風邪もひくことはないだろう。
「冷たい奴だなぁ。そんなんだから彼氏が出来ないんだｚ――――――いだっ」
「それはあんたもでしょ。あんまり余計なことを言うと夢想封食らわすわよ？」
「そ、それは勘弁」
　霊夢の手に握られたスペルカードを見るなり、魔理沙の顔が引きつる。霊夢はその様を見て鼻を鳴らし、ため息を吐きながら台所に向かった。

お茶を用意してくれるのだろう。こうやってさりげなく優しくしてくれるのが霊夢のいいところだ。

「お茶代はらいなさいよ」

「金取るのかよ!?」

訂正。優しくなかった。